

『哲学の探求』第二十一号刊行にあたって

第二十一回全国若手哲学研究者ゼミナールは本年七月十七・十八日の両日静岡県熱海市で開催されました。ここ数年ではもっとも多い約四十名の参加者を確保できたうえ、遠く鹿児島・広島・名古屋や信州の松本、さらには仙台から参加された方々がおられたのは喜ばしいかぎりです。本誌はそのおりの研究報告の集大成です。

このゼミナールは所属大学や専門にはとらわれずに広く自由な雰囲気なかで議論することを目的としています。ゼミナールそのものも恒常的な組織としてあるわけではなく、毎年そのつどの参加者の総意によって翌年の開催が決定されるようになっていきます。また年齢や参加資格の制限などありません。要するに好きな人が集まって好きなように研究発表をして議論を深め、やる気があるなら雑誌を作つて次の年もまた開催するというありかたで二十年以上も続いているということになります。このように自主任意をモットーとすることがかえつてこの息の長い活動を可能としているのでしよう。

もちろん肝心なのは長く続いているという事実よりもそこでなされている発表と議論の水準のほうにあります。その点についてもこのところ著しい進歩がみられます。日ごろは離れて活動している若い研究者たちがつどつて活発に意見を交換することでなされたのがこの『哲学の探求』であるわけです。

現在大学を取り巻く状況は大きく変化しつつあります。一九九一年におこなわれた大学設置基準のいわゆる「大綱化」によって、カリキュラムの大幅な自由化が可能となりました。教養課程において哲学関連科目を開講する必要がなくなつたために、従来からも厳しい状況にあった哲学の大学院生の就職の機会はますます狭められてきています。こうした困難な状況にありつつ哲学を志している若い人々に期待されるのはより多くのそしてより高い水準の研究であることはいうまでもないでしょう。全国若手哲学研究者ゼミナールがこれからもそうした質の高い研究をめざす人々の集まりであり続けることを望んでやみません。

一九九三年九月

第二十一回全国若手哲学研究者ゼミナール世話人一同